

<感謝> 各方面から岩村についての問い合わせが続きますので、お応えします。

アレッポの「カヨ子基金」の孤児の家は損壊など紆余曲折がありました。

2024年のロシア・ウクライナ戦争、イスラエル・ガザ戦争、ミャンマーの内紛などを見聞きし、「平和」は、過去の思い出になろうとしています。

そんな時代だからこそ、皆さまから支持されている神戸国際支縁機構、「カヨ子基金」は地道にボランティアを展開させていただいています。阪神・淡路大震災から31年、東日本大震災から15年、熊本・大分地震から10年、能登半島地震から2年です。1月9日には島根県東部で震度3以上を観測しました。いつ地震、風水害、災害が起きてもおかしくない日本列島です。

創立者岩村義雄は、アフガニスタン・ボランティアから帰国した直後、歩行ができないほど身体は衰弱していました。今までのつもりつもった疲労などのため死線を彷徨いました。

神の憐れみでしょうか。海外をはじめ日本各地で被災なされた家族のようになった方々に希望の灯をとすように、12月2日、医師たちは歩けるように服してくださいました。緒方俊一郎先生、村田充八理事、有田貞一牧師をはじめ多くの方々から愛され、慰められ、励まされ、昏睡状態から立ち上がることができました。教会、皆さまのお祈りとご厚情によるものと感謝しています。

入院は、四半世紀以上にわたる海外ボランティア、能登ボランティア、毎月、東北と九州の復幸米作り、後見人ボランティア、炊き出しなどの^{こんぱい}困憊のためです。常日頃、神戸国際支縁機構を応援してくださる藤原りつ子名誉会長の朝霧病院に北村恭男理事が搬送してくださいました。弓岡^{としき}稔貴医師はアフガニスタンでウイルスに感染、下垂体炎の疑いのため、MRIなど検査、丁寧に加療されました。神戸大学医学部附属病院に転院し、マイケル・シャクルトン理事、私が乾妃那医師の説明を受けました。岩村にとり、生まれてはじめての病院生活でした。

無休で「生き急ぐ」働き方に明け暮れていました。ボランティア人生を振り返る機会となりました。本人は退院後、季刊誌『支縁』の編集後記に綴りました。

朝霧病院、神戸大学医学部附属病院で生きた^{しかばね}屍として^{せんもう}譎妄で心神喪失でした。しかし、はじめて教えられました。16歳の時、恩師末次一郎[1922-2001]は、「自分を捨ててその土地に順応してしまおうとするからこそ、いままで経験したことのない低い生活が平気でつづけられる」と私に諭しました。ボランティアこそ、未開と貧困に挑戦する道と出てきました。入院してはじめて看護のお働きを身近に拝見しました。注射器や薬などの医療ではありません。昼夜を問わず、キュア(治療する)より、ケア(手当て)する献身的な働きに接し、打ち砕かれました。1872年に来日した医師ジョン・カッティング・ベリー[1847-1936]がこの病院だけでなく、日本で最初に監獄調査をし劣悪な環境を解放するために西日本を回りました。神戸国際支縁機構はベリー宣教師に倣う働きです。人権が軽んじられている人々を解放する働きを始めた病院に入院できた恵みを感じています。

編集後記 季刊誌『支縁』No.53 2025年11月号 岩村義雄

甲状腺ホルモン、コルチゾール¹、性ホルモンの数値は最低。数値はあがらないはずが回復。医師曰く奇跡でした。こむら返り、便秘、譎妄も解消されました。国の内外に出て行く青信号でした。今年のクリスマス・ウィーク、雪に埋もれるほどの奥能登、またシリア国アレッポの孤児たちの安否を岩村もみなさんも共に確認できて喜んでいきます。

「カヨ子基金」代表 佐々木美和

¹ 副腎皮質の束状層で産生されるステロイドホルモン。(ヒトの最も重要なステロイドホルモン)の分泌を促す副腎皮質刺激ホルモン。